

一般部門 選評一覧（二次選考を担当した読者選考委員からの選評の抜粋）

目次（タイトル五十音順）	頁
いたわる町	1
おりよう	1
帰ってきたギャルソン	1
『刀ゆうれい』—幕末京都所司代事件帖	1
鴨川今昔物語り	1
京狩野の女絵師	1
京都三条会 謎解きバル三日月	2
ケセラセラ	2
サンゼンたる	2
地縛霊のヒッチハイク	2
就活なんて大嫌い	2
植物姉妹	2
スマイルカット	3
月は真宵に、八千代に花は	3
とりかへばやプリズム	3
八文字屋自笑 流水の宴	3
はやてに捧ぐ	3
108万円のピック	3

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
いたわる町	<p>○起承転結が綺麗にまとまっており、小説としてとても完成度が高かった。</p> <p>○登場人物全員、物語に必要なキャラクターであり、様々出てくるのにそれぞれ描き分けや立ち位置などが明確になっており素晴らしいと思った。また、登場人物がそれぞれ魅力的で無理のない関係性の範囲に収まっている。</p> <p>○「父さん」という主語が効いている。一人称とも三人称とも取れる不思議なリズムだ。</p> <p>○父さんや周囲のキャラクターを動かすに当たり相当な専門知識、幅広い分野の知恵が必要だと思うがどれも丁寧に調べられているように感じた。</p>	<p>○生と死をテーマに掲げている以上免れない展開だと思うのだが、登場人物の死や別れがあまりに急に驚いた。伏線を少し張っていたら心構えができたかもしれない。</p> <p>○メインキャラクターの読み方は最初に少しでも触れておいてほしかった。</p> <p>○京都に住んでいない方にとっては、その描かれている場所の想像がつきづらく伝わりにくいのではないだろうかと思った。</p> <p>○現在と過去の、行ったり来たりが多く、時系列が分かりにくい。</p>
おじょう	<p>○作品創作に当たり、資料を基にした丁寧なリサーチがなされていると感じた。</p> <p>○京都の描写はとても上手く、春の紫野今宮の「やすらい祭」を登場人物が歩く場面や花街の雰囲気は優美で繊細に表現されていると思う。</p> <p>○主人公の妹が大坂新町に身売りされそうになり、主人公が捨て身で必死に阻止する場面は、読んでいて思わず感情移入するほどのリアルさがあった。</p> <p>○物語の流れもスムーズで、人物や場面の描写も丁寧だった。読後もすがすがしく、女の強さを感じた。</p>	<p>○登場人物の関係性や時系列が解りづらい。</p> <p>○本作のラストに当たる年代の後、さらに激変していく主人公の人生を最期まで追いかけ、具体的に彼女がどのように生き抜いたのかを描き切った一代記的な作風にした方が、作品としては潔いのではないかと。</p> <p>○登場人物についての説明がなく、登場人物の行動が書かれた文章が続く。また、主語のない文章が多々見受けられるため、一つ一つの文章自体、何が言いたいのかよく分からないものもある。適切な地の文、説明文は必要だと思う。</p>
帰ってきたギャルソン	<p>○京都を知らない人にも京都の特有の空気感が過不足なく伝わるような、良い文章が綴られている。</p> <p>○京都の生活に密着した書き方で、京都弁も自然なため、京都の世界観に浸れる。</p> <p>○登場人物のそれぞれの個性が分かりやすかった。各登場人物に絞ったお話も読みたいほど、主人公から、少ししか登場しない人物まで魅力的だった。</p> <p>○お茶をたてる時、ろくろを回す時、うつわの説明などどれも表現が上手いと感じた。</p>	<p>○タイトルから内容を想像しにくい。</p> <p>○作品の盛り上がりもう少しほしかった。結末の不完全燃焼感が強い。</p> <p>○登場人物が多い中、それぞれのキャラクターの特徴があまりない。また、ヒロインに対して共感が持てず、魅力があまり感じられなかった。</p> <p>○物語の本筋がどれなのか分からない。そのため先が気になることがない。どれか一つ大きな柱となるエピソードがないと軸がぶれてしまう。</p> <p>○京都にまつわる知識を書くのはとても良いが、一気に詰め込まれる感じがあったので、もう少し減らすか、小出しにすると良い。</p>
『刀づれい』—幕末京都所司代事件帖	<p>○創作リサーチもなされており、主要な部分を押さえつつ、人物の関係性や展開が複雑にならないように考慮されていると感じた。</p> <p>○物語の所々に京都独特の情景や風情描写が優美に描かれており「京都」が上手く生かされている。</p> <p>○幕末の尊皇派、新撰組、佐幕派などの綺麗な整理ができています。説明書にならないような工夫と配慮がされている。</p> <p>○「○○○やさけ」「いらわはったん」など、ちょっと前の京都の言葉(大阪の人物もいるので、関西の言葉と言うほうが正確だが)が自然で上手い。</p>	<p>○登場人物が多く、特に最初の方は登場人物の名前やどのような人物関係であるか、よく理解できなかった。</p> <p>○タイトルにもうひとひねりほしい。物語展開は上手いだけに、勿体ないと感じた。</p> <p>○「天誅が横行する幕末の京都」の雰囲気をもう少し加えて、物語に一層の臨場感を出すと思いたい。</p> <p>○人物描写がやや薄く、感情を揺さぶられるような感覚があまりなかった。もう少し、人物描写があると、話に深みが出ると思う。</p>
鴨川今昔物語り	<p>○一つ所にめぐる因果、生と死、未来と過去・現在など答えの出ぬ問いに一度は誰も行き当たったことがあるだろう。それらを考えさせる内容であった。</p> <p>○読み進むにつれ、登場人物に感情移入していく物語展開が良かった。時代エンタメ小説の道具立てを立体的に上手に整えている。</p> <p>○大坂の陣のころを切り取った伝奇時代小説。文体の安定感、筆力、特に描写力に一日の長あり、比喻も自然。引き込まれた。</p> <p>○人物描写が丁寧で、映像が見えるようだった。話の展開もテンポが良かった。</p>	<p>○話の展開の仕方は改善の余地があると思った。部分部分におもしろみはあるが、物語全体を通して緊張感、疾走感が保てておらず、だらだらと長い印象を受けた。</p> <p>○プロローグ、エピローグとも、何度読んでも、作者がこれらを書くことによって、どういう効果を狙っているのか分からない。本文だけで、スッと始まりスッと終わる方が断然良いと感じた。</p> <p>○この物語を通じて何が言いたいのか、どこを楽しんでほしいのか、そういった作者の顔のようなものが見えてこなかった。</p> <p>○地の文が神視点の説明文になっていて、物語として楽しめる部分が少なかったのが非常に残念。会話の中で読者を納得させるか、他にエピソードを入れていく方が盛り上がり、厚みが出てくると思う。</p>
京狩野の女絵師	<p>○展開にも文章にも無駄がない。はじめは難しい作品だと思っていたが、それを超えておもしろくどんどんページをめくっていった。素晴らしい作品。</p> <p>○タイトル、題材が良い。狩野派の絵には現代的な妖艶さを感じており、その色めきたつ女絵師が主人公であるというのが魅力的で、前のめりになって読んだ。</p> <p>○登場人物が魅力的なキャラクターであり、特に主人公の背負ってきた過去や魔性の女として生きざるを得ない諦めのようなものが丁寧に書かれていて、とても好きになれた。</p> <p>○文章表現が上手いと思った。時代小説らしい重厚さが伝わってくる。</p>	<p>○厳しいことを言えば、「あらすじ」を少し膨らませただけの内容であった。冒頭で大長編の幕開けを期待させられただけに肩すかしのショックが大きい。長ければ良いというものではないが、物語に見合った長さというものはあると思う。</p> <p>○この物語を通じて何が言いたいのか、どこを楽しんでほしいのか、そういった作者の顔のようなものが見えてこなかった。</p> <p>○地の文が神視点の説明文になっていて、物語として楽しめる部分が少なかったのが非常に残念。会話の中で読者を納得させるか、他にエピソードを入れていく方が盛り上がり、厚みが出てくると思う。</p>

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
<p>京都三条会 謎解きバル三日月</p>	<p>○一話一話にドラマがあり感動がある。日常に起こりそうな謎を描いており、ひょっとして現実でも起きているのではないかなと思わせられた。</p> <p>○誰にでも読み易い柔らかな日本語で書かれており、「謎」もほのぼのとした内容で、爽やかな読後感。</p> <p>○各話に登場するおばんざいに食欲がそられる。思わず次のごはんを想像し、まるで実際の店を訪れるように、知らず知らず楽しみにしてしまう。</p> <p>○京都についてとても丁寧に詳しく、魅力的に書かれていた。京都に住んでいても知らない京都のことがふんだんに書かれ、京都についてもっと知りたいと思わせる力がある。</p>	<p>○謎のクオリティーについて、細かいディテールにもこだわってほしかった。また、各章の小さな「謎」だけでなく、全編を貫く謎や伏線があった方がおもしろいと思う。</p> <p>○短編連作でも全編を通しての仕掛けがあるとより楽しさがあるので、全体を通しての謎や伏線があった方がおもしろいのではないかな。</p> <p>○将棋愛好家が集まる店での謎解きなのに、将棋がらみの解決がないのは残念。たった一話でもそういうアプローチがあれば、この設定にした理由に納得が得られる。</p> <p>○もう少し一つ一つの物語を人物描写も含めて深く書くことができれば、もっと良い作品になると感じた。どの物語も素敵だが、あっけなく感じてしまい、勿体ないと思った。</p>
<p>ケセラセラ</p>	<p>○哲学の道など、京都の街並みが自然に文章に織り込まれていて、京都文学賞に相応しい作品だった。</p> <p>○お笑い(漫才)は昔から現代まで、多くの人に親しまれているテーマであるし、好きな人も多いことが予め想定されるため、訴求力が高いと言える。</p> <p>○最後の盛り上がりは良かった。</p> <p>○情景の描写は説明的でなくすんなりと入ってくる。</p> <p>○タイトルが最後に輝く作品は読後感がすごく良い。</p> <p>○文章のテンポ感が良くて、全体を通して読みやすい作品だった。</p>	<p>○内容があまりに駆け足な展開で、主人公たちの心情や成長の様子の説得力がいま一つ欠けているように見えた。その結果、心を添わせて感動するのが難しく感じられたのが惜しかった。</p> <p>○地の文で直接的に気持ちを書きすぎ。「俺は悔しかった」「俺は感心した」など。遠回しな表現や、セリフや情景で間接的に感情を描き出す技を覚えると、もっと味わい深くなると思う。</p> <p>○話し言葉が「い」入りだったり、誤字が散見されたりして引っかかってしまい、耳に心地良い京ことばやリズムよい関西弁に聞こえてこず、読み進めるのに壁となってしまい残念だった。</p>
<p>サンゼンたる</p>	<p>○とにかく読ませる力がすごい。テンポ、歯切れの良い文章で、最初から最後までグイグイと一気に読ませる。</p> <p>○前半から物語を引き立てる細かな伏線が散りばめられており、作品に厚みを増していた。</p> <p>○主人公が苦勞しながらも、戦国時代で周囲の人々と心を通わせていく様は読んでいて好感が持てたし、現代社会において培った知識や経験を生かした物言いは気持ちが良かった。</p> <p>○物語にリアリティがあり、忍びの者としての宿命である「人を殺める」場面の葛藤と心情についての描写は秀逸だった。</p> <p>○ストーリーがすっきりしていて、非常に読みやすかった。</p>	<p>○人物描写について、作者が信長のことが好きなのは非常に感じ取れ、読み手が知っている知識も併せてイメージできたが、他の人物描写がもう少し具体的に、人間味あるように感じられると深みが出るかと思う。</p> <p>○話の進み方や、歴史知識など、読者の知識にゆだねられているところがあり、読み手の側に立って、また京都のその場所へ行ってみたいくなるような表現にすると、分かりやすく興味ももっとわくかと思う。</p> <p>○タイトルは、初見では「なんだろう」と興味を引いたが、読了後の感想は本文の内容を端的に表現しているとは言い難かった。</p>
<p>地縛霊のヒッチハイク</p>	<p>○散りばめられた伏線や、登場したキャラクターの役割を余すことなく使い倒しているのが上手い。</p> <p>○展開もスムーズでどこも違和感がなく読み終えることができた。完成度の高い作品だと思った。</p> <p>○死んだ霊が誰かに憑りついて問題を解決するという展開はよくあるが、それをヒッチハイクと表現するところが新鮮だった。</p> <p>○章の立て方が良く、グイグイと読ませる力がある。そしてその展開も、端折られすぎずかといってダレることもない、良いテンポ。</p>	<p>○霊にヒッチハイクして人間に取り憑くときの決まりごと、細々と設定されていたわりに早々に放棄されていた気がした。おもしろい設定だっただけに、それをしっかりと生かし、より刺激的に展開させてほしかった。</p> <p>○登場人物全員が優しく、良い人ばかりで、読み終えた後にこれといった印象が残らない。また、やや主人公に都合良く展開しすぎている傾向が感じられた。</p> <p>○怒りや嘆きなどのネガティブな感情の露出がオーバーに感じられた。読者が想像するよりも強いキャラクターの感情は、物語への没入を切断してしまう。</p>
<p>就活なんて大嫌い</p>	<p>○「就活」という多くの人が経験するテーマについて、かなりリアリティをもって書かれているので読みやすく、共感しやすい。</p> <p>○キャラクターが魅力的。それぞれが良い働きをしている。</p> <p>○一つ一つの表現に作者の方の個性がきらりと光っていて良かった。かなりたくさん作品を書かれていて、物語を紡ぐことに慣れているように文の端々から感じられた。</p> <p>○同じ登場人物で就活に絞ったストーリー以外のものも読んでみたいと思った。</p>	<p>○あまりにも何も起こらなさすぎる。時間の流れ方が薄い。</p> <p>○最初からずっと就活面・人生面で葛藤してきて、読者もそれに寄り添って考えてきたのに、最後急に手の平返しで恋愛ものとして着地したので拍子抜けした。</p> <p>○ところどころの塗りつぶしが気になり止まって考えてしまった。</p> <p>○鴨川やデルタなど、身近な人は想像できるが、知らない人はなかなか想像するのが難しいように思う。もう少し背景やそのときの空気、四季など、細かく描写できていればより京都の良さが伝わったと思う。</p>
<p>植物姉妹</p>	<p>○特に物語の後半で主人公が立ち直っていく様子が丁寧に描かれていてよかったと思う。読んでいて胸が詰まる瞬間があった。</p> <p>○姉妹間ならではの心の機微を繊細に描いたものだと思う。全体的に少し暗めの描写が多い一方で、決して暗すぎることはなく、読んでいても変に重たくならない。そのあたりのバランスを取ることは非常に難しいと思うので、描き方が絶妙なのだと思う。</p> <p>○人物像が丁寧に描かれていて、感情移入しながら読むことができた。主人公以外の登場人物も人柄や背景が過不足なく伝わるように描かれていて、リアリティがあった。</p> <p>○構成のしっかりした佳品だと思う。無駄がない。文章も無駄がなく適度のリズムがある。</p>	<p>○死に対する根幹の部分が割愛されていて描き切れていない。作者は何を伝えたかったのか読み取れない。</p> <p>○もっと強弱があってもよかったと思う。微妙な心の機微を描く作風のゆえ、大きな動きを出しにくいのはもちろんあるかもしれないが、山場となるような場面があれば、読者の心により深く染みこむ作品になるような気がする。</p> <p>○きらりと光る比喩表現は良い点だが、地の文章とマッチしていないという点で全体の統一感はほしかった。</p> <p>○登場人物がストーリーありきで作られているような不自然さがある。</p>

タイトル	良かったところ	改善した方が良いと感じたところ
スマイルカット	<p>○舞台になる街並みがよくイメージできる。詳細かつ丁寧な描写に良さを感じた。また、一つ一つの文章が適度な長さで難しい表現もなく、物語として全体的に分量があるにもかかわらず、とても読みやすかった。</p> <p>○プロローグの冒頭の表現が素晴らしいと感じた。台詞がまず素敵で、一体どういう意味なのか、引き込まれる。そしてそれが物語全体を通して関わってきており、主人公の人物像にリアリティを与えていた。</p> <p>○発達障害の子どもたちにどのように対応するべきか、悩み考えながら取り組んでいく主人公の思考や心情が生き生きと描かれていて、臨場感があり、読みながら自分もどうすれば上手くいくのだろうとつい一緒に試行錯誤したくなってしまうのが楽しかった。</p>	<p>○主人公を応援する人物が複数登場しているが、いずれの人物もバックグラウンドがあまり描かれていないので、やや浅薄な印象を受けてしまう。それぞれが主人公にかける言葉はどれも台詞として素敵だけに、勿体ない。</p> <p>○回想が「～の頃、～していた」といったパターンで始まる。流れが途切れ、散逸する印象を受けてしまう。回想シーンがカギとなっているからこそ、移り変わりはもっとスムーズかつワンパターンにならないようにするのが望ましいと感じた。</p> <p>○文章表現に技巧がなく、良い意味では読みやすいが、平凡な表現で単調だとも言える。初めてスマイルカットをしたとき子どもがパニックになってしまったシーンは、特にもう少し違う表現や描写ができると思う。</p>
月は真宵に、八千代に花は	<p>○すいすいと読みやすい展開で、お仕事小説としては軽くて受け入れられやすい。キャラクター文芸としてすぐにも出版できそうなぐらいの完成度だった。</p> <p>○私も頑張ろうと思ってしまう、応援したくなる主人公のキャラクターが魅力的だった。</p> <p>○食事シーン（食べる前の食べ物の描写や食べるための動作）が丁寧で、映像として想像できる。</p> <p>○無駄なシーンが一つもない。読み終わってしまうことが残念に思われるくらい、この物語の世界観が丁寧に描かれていて、どっぷり浸かってしまった。</p>	<p>○最初から展開の早い物語ではあるが、数カ月の間にいろいろ盛り込み過ぎて、リアリティが薄れてしまった。</p> <p>○上手くまとまった作品ではあったが、目新しさは感じられなかった。</p> <p>○力の込められた文章があるため、かえって流して書いたであろう文章が浮き彫りにもなっている。誤字脱字や表記揺れ、同じ表現の繰り返しは読中の流れを妨げるため、言語化できない「印象」のようなものも順位に寄与する新人賞の投稿作では、特に推敲を行う方が良いと思う。</p>
とりかへばやプリズム	<p>○この小説の元になった名著「とりかへばや物語」は読んだことがあるが、さすがに翻案小説ということで違った切り口と展開でおもしろかった。</p> <p>○第1章から第15章よりなる本編は、各章の構成がよくまとまっており、それが複合的に複雑な世界観というものを見事に描写していると感じた。</p> <p>○著名な女流作家や漫画などで現代語版を読んだりすることはできるが、いろいろな立場の視点から話を展開させたところが、宮廷の奥だけでないおもしろさに繋がっていると思った。</p> <p>○各章ごとに切り替わる人物の視点に合わせて文体の描き分けが来ているのは高評価。作者の筆力の高さが分かる。</p>	<p>○章ごとに中心人物を切り替え、多人数視点で物語を語る構成は良いが、それが15章にも分かれるのはやや行き過ぎで読みづらい。</p> <p>○多人数視点の小説の持つ強みの一つは、一つの事件や事象について複数人の異なる物の見方や価値観が示されることであるが、本作はその点がやや不徹底で、視点を切り替えるのと同時にプロットが先へ先へと流れていってしまうことも多い。</p> <p>○メインの人物の内面描写に乏しく、本作の主題である男君と女君の「とりかへ」自体のおもしろさを十分に生かしていない。あまり忙しく視点の切り替えを行うよりも、男君と女君が一人称で自らの内面を告白する部分を増やして、ジェンダーとセックスの揺れをはじめとする彼ら/彼女らの心理的葛藤を描いた方が良かった。</p>
八文字屋自笑 流水の宴	<p>○しっかりとした考証や知識に裏付けて書かれているのだろうと思わされる。なじみのない世界が舞台であったが、興味を引かれた。</p> <p>○桁違いに巧い。文章、展開、センス、知識、どれにおいても優れている。一切の無駄も違和感もなく、手元に置いて、小説を書く「お手本」や「指南書」にしたい。</p> <p>○人間模様がとても丁寧に書かれていて、読後は人の人生を横で眺めていたような気持ちになった。登場人物が多いと書くのが大変になるかと思うが、全く手抜きを感じなかった。重厚で読み応えがあり、読む人を満足させる作品だと思う。</p> <p>○世界観がとてもしっかりとっていて、隙がない。</p>	<p>○タイトルに違和感がある。人物伝というより群像劇、あるいは江戸の業界モノであろうと思う。「宴」がその隠喩なのだろうが、もっとキャッチーなタイトルでも良いのではないかと。</p> <p>○登場人物中心の視点は物語の最初からあった方が良かったと思う。その方が、読者の期待値が上がったのではないかと。現状では、前半の一本調子が出版業界の知識物語に過ぎず、その情報量と安定した読み心地で読まされていくので、「先が気になって止められない」といったような種類の醍醐味はなかった。</p> <p>○専門用語も含めてもう少し分かりやすい説明がほしい。読み進めていともとにかく設定が頭に入りにくい。</p>
はやくてに捧ぐ	<p>○一見、根底「物語みたいなき過ぎた」若い子のラブストーリーに思えるけれど甘々でもなく、ありえないと切り捨てられるものでもなく、主人公の「ワケあり」によって絶妙に冷静さと現実感に繋ぎ留められていて、見事だった。</p> <p>○読者が前半から主人公の抱える葛藤に少しずつ引っ掛かりを感じるようになっていて、引き込み方が上手い。</p> <p>○クライマックスが非常にドラマチックで良かった。</p>	<p>○舞台が京都でなくても良さそうなので、登場人物のあこがれの地である理由か、雲龍図のエピソードがもう少し効果的に出してくれば良かった。</p> <p>○見ず知らずの10代後半の男女が2人だけで同居する、という設定にリアリティを感じなかった。</p> <p>○死を考える程の「いじめ」の描写がこちらに迫ってこない。</p> <p>○主人公の性格設定もところどころ矛盾があるように感じた。</p>
108万円のピク	<p>○登場人物が全員魅力的。嫌な役回りである登場人物でさえも、ちゃんと血が通っていると感じた。</p> <p>○切実なひもじさの描写にリアリティがある。生活に直結する路上ライブ風景、消耗するカロリーと投げ銭入れの金との対比、ハードロックを作りながらきゅうりをかじる等、空腹と暑さと闘うホームレス歌手が目についた。表現が上手い。</p> <p>○起承転結がはっきりしていておもしろい。夢もあり、適度にリアリティもあり、明るい終わり方で好感が持てる。また、京都弁が心地良い。テンポがよく、どんどん読み進められる。ギターが戻ってくるラストも好きだ。</p> <p>○誰しもの中にある幼稚さや脆さや温かさや夢や希望をさりげなく織り交ぜて描いている作品だと思う。良い意味で日常から離れていない作品であるように感じた。</p>	<p>○読みやすかったけれどさっと終わってしまった印象。登場人物の心情などを深堀りしていくと、さらに魅力的な物語になると思う。</p> <p>○場面転換、切り替えに何らかの流れか副題を付けるなどのとっかかりがほしかった。いきなり変わるので読んでいて混乱した。</p> <p>○主人公の年齢が50歳くらいの設定だが、言動や所作、性格や喋り方など年相応さが感じられず、年齢不詳に思えた。もっと見た目の描写を取り入れたり、身体の不調など“らしさ”などの表現があればリアリティが出たのではないかと感じた。</p> <p>○京都に戻る道中の出会いや主人公の心理描写は大事に描いてほしい。主人公の内面的変化と成長を書き、再起するまで表現できればより良い作品になっただろう。</p>